2025 年 10 月 5 日　　西村隆星

主題「友よ、もっと上席に」

ルカの福音書 14:7-14

序

先週は幸いな洗礼式を感謝いたします。魂が救われる喜びは、他では絶対に味わえない喜びです。教会がその喜びに満たされたわけですが、天においても喜びが溢れたのだ、と思わされます。今日は、その「天」における「報い」について考えていきます。

さてみなさん、最近結婚式の披露宴に行かれた人はいますか？披露宴に行くと席が決まっていますよね。お世話になった恩師や会社の上司などには、いわゆる「上座」を用意するわけです。そして、友人たちや、親戚、親族と、席が決まっていますよね。自分たちの結婚式でも誰を何処の席にしたら良いのか随分悩んだのを思い出します。イエスのこの時代にも「上座」や「末席」はありました。日本の披露宴のような座り方とはちょっと違ってですね、当時のユダヤの食事の席や宴会は、どうやら U 字型で食事をしていたようです。(図参照)

この U 字の一番下の部分、ここが主賓席。「上座」ですね。もっとも重要人物が座る席です。その次はその主賓の左の席、その次は主賓の右の席、、、というように座る場所によって、偉さというか、身分の高さ、というか、重要度が分かるようになっているわけです。そして、この食卓にいた人たち、つまり、「客として招かれた」「律法の専門家たちやパリサイ人たち」は「上座を選んでい」た。自分たちは偉い存在だ、と重要な存在なんだ、とこぞって席の取り合いをしていたわけです。そんな状況でイエスは語り始められたわけです。8-9 節。

１．招かれた者たち

> ***「結婚の披露宴に招かれたときには、上座に座ってはいけません。あなたより身分の高い人が招かれているかもしれません。あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』と言うことになります。そのときあなたは恥をかいて、末席に着くことになります。***

イエスは彼らに「上座」に座ってはいけないというわけです。なぜなら、あなた方よりももっと身分の高い人、偉い人が招かれているかもしれないから。ちょっと想像してみて欲しいと思いますが、もし自分がこの会にとって重要な人物に違いないと思って、意気揚々と「上座」に座っていて、そこにもっと重要な人が来たら、どうでしょうか。自分の思い上がりに、とても恥ずかしい気持ちになると思うんです。さらには、招いた人が自分のところにやって

きて「この人に席を譲ってください」と言われて、自分が座っているその席を譲らないといけない。そうしたら、もう自分に残された席は「末席」しかない状況になってしまい、恥をかく。だからこそ、イエスは言われる。10 節。

> *招かれたなら、末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『友よ、もっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのとき、ともに座っている皆の前で、あなたは誉れを得ることになります。*

招かれた時、末席に座るのであれば、招いた人が「友よ、もっと上席にお進みください」と言ってくれて、皆の前で誉れを得る。なぜなら「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです」。

ここまで読み進めてきて、イエスの言われることはよく分かると思います。そうやって恥をかきそうなことって実際ありそうだと思わされる。しかし、ここでイエスが言いたいのは、恥をかかないための HOW TO などではないということです。勘違いしてて恥ずかしい人！と誰かに後ろ指さされないように気をつけるんだよ！と、そんな意味で語っているのではないんです。私自身、今回の箇所を読みながら、そもそも別に「上席」「上座」に着きたいと思わない。全然「末席」でいいんだけど。。。と思ってしまう。それゆえにこの話自体があんまりピンと来ないね、と妻と少し話しました。じゃあはい、この話は自分とは関係ないから、これで終わり！でいいのか？というとそういうわけでもないんです。それでは、イエスはここで一体何を語りたいのでしょうか？

ここでイエスが語りたいこと。それは食事や披露宴の席順だけの話ではない。生きていく中で自分をどこに位置付けたいか、ともっと広い意味で考えていくと分かりやすくなります。私たちが生きる時代は情報社会で、私たちは常に人と比べられている、と感じやすい時代です。その中で、私たちはどのように「自分の価値」を見出そうとしているのか、と問われるのです。もっと成長しようと「上」を目指して頑張ることもあれば、逆に誰かの失敗を見て「自分のほうがましだ」と安心することもある。けれども、そうやって比べ続けることは、結局、私たちの心を不自由にしてしまうのです。そんな私たちにイエスがここでいいたいことは何か。それは、私たちをどこに位置付けるかは、神が決められるということ。ここに出てくる「上座」に座りたがるパリサイ人たちも、誰が偉いかと度々論争する弟子たちも。そうやって比較するのは罪から来る人間の性(さが)。しかし、イエスは他者との比較の中で、あの人より自分は上とか下とか、そんなこと決めなくていいんだ、と言われているんです。

私たちが「自分の価値を自分で決める」ことにとらわれてしまうとどうなるか。自分が順調でうまく行ってる時は良いかもしれません。しかし、何かにぶつかった時、うまくいかない時、自分の価値が大暴落してしまうんです。自分以外の他者に自分の価値を決めさせるのも違います。そうすると誰かのひと言に必要以上に傷付き過ぎたり、怯えたりするようになってしまう。そうすると時に、自分は無価値でいない方がいい、そんなふうに簡単に思えてしまうものです。しかし、神が私たちをすでに「価値ある」ものとして、「尊い」ものとして「愛して」くださっている事実があるんです。有名な箇所で、ここが大好きだと言われる方も多いですが、イザヤ書 43:4

> *わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だから、わたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにする。*

だからこそ私たちは、自分で自分を大きく見せようとしたり、誰かと比較なんてしなくて良いんです。そんなくだらないことからは自由になっている。神にあって自由になっているからこそ、この世においては喜んで「末席」に座ることができる。そうやって、神に愛された子どもとして自分を低くして生きるならば、神の国の祝宴では、神ご自身が「友よ、もっと上席に」と私に声をかけてくださるんです。続けて 12-14 節。

２．招いた者たち

> *イエスはまた、ご自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や晩餐をふるまうのなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。彼らがあなたを招いて、お返しをすることがないようにするためです。食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」*

ここでは「招いた人」に対して、誰を「昼食や晩餐」に呼ぶのか、招くのか、について語られています。イエスは言われます。「友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません」と。それでは誰を招けばいいのか。それは、「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たち」。ここで言いたいこと。それは、これから近しい者を食卓や宴会に招いてはいけない、ということを言っているわけではありません。これは当時の言い回しとして、「友人や隣人よりもむしろ貧しい者たちを招け」ということ。つまり、近しい人たちはすでに招かれている。それよりもあなたが目に留めるべきもっと大切な、招くべき人たちがいる、ということ。それが「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、

足の不自由な人たち、目の見えない人たち」であるわけです。なぜ彼らを招くべきなのか。ここでは「お返し」という言葉がキーワードです。「友人、兄弟、親族、近所の金持ち」は「お返し」をしてくれます。つまり彼らを招くとこの世ですでに「報い」を受けてしまう。

しかし、「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たち」は「お返し」をすることができない。それゆえに「あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受ける」。というわけです。なるほど。そういうことか、と納得しつつ、普段の自分を照らして見るとき、やはりどこかで損得勘定が働きながら人と接する自分がいることに気付きます。一生懸命誰かをもてなす。親切にする。だけど、それに対して、もてなした相手が、何のお礼もなく、報いもなく、お金や労力だけが使われていったとき、それに自分は心から喜べるか？続けられるか？搾取されている、という気持ちにはならないか。と問われます。全くなりません。天において報いがありますから、心からの喜びです！と、自信をもって言えるかと言ったら、正直悩んでしまいます。ルカ 6:32-36 にはこうあります。

> *自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも同じことをしています。返してもらうつもりで人に貸したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、同じだけ返してもらうつもりで、罪人たちに貸しています。しかし、あなたがたは自分の敵を愛しなさい。彼らに良くしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになります。いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くなりなさい。*

ここにあるように、私たちの父があわれみ深いのだから、私たちもあわれみ深くなるのです。すなわち、「自分を愛してくれる者たちを愛」するだけではなく、自分の外側にいる人たちをも愛する、ということ。それは神が「恩知らずな悪人」である私たちにもあわれみ深いお方であるから。自分の外側にいると思う人たち、本日の箇所で言えば「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たち」に対して、返してもらうつもりではなく、「良くしてやり、返してもらうことを考えずに貸し」ていくのです。

それは、自分でラインを引いて、ここまでが私の領域とするのではなく、そのラインをあわれみ深い主にあって「壊し」、「共に生きる」、ということ。この世にあってその人たちから「お返し」を受けることはなくとも、その生き方を神が覚えていてくださり、天において報いがあるのです。

結論　神の国で与えられる席

今日は、「上座」「上席」や「末席」、人を招く上での「お返し」ということから、この世で生きながら、天における「報い」を思い描き、へりくだって生きる、ということを共に考えてきました。しかし、実際にこのように生きる難しさもあるなぁ、ということを思わされます。そもそも、「天で報いを受けたいから」という理由で、嫌々ながら、仕方ないな、と思いながら、心が伴わないのに、「末席」に座ることも、「お返しのできない人たちをもてなすことも」できないはずです。

それでは心を伴いながら、自分のラインの中だけで生きるのではなく、あわれみ深い主にあってそのラインを「壊し」、「共に生きる」ことは机上の空論なのか。これは出来もしないことなのか。そうではありません。なぜなら、この世に生きて、常に仕える者として、へりくだり続け、天において最も高くあげられたお方がいるから。私たちの主、イエス・キリストが私たちに愛を教えてくださったから。それでは、イエスは、天において高くあげられるために、本当は嫌なのに、仕方なく、しょうがないから、私たちと共に生きてくださっていたのか。違います。キリストが神の御姿を捨てて人となってくださったのも、十字架の死にしたがってくださったのも、私たちを愛する、その愛ゆえにです。

だからこそ私たちが自ら「末席」に座り、「お返しのないもてなし」を続けて生きるには、やはりキリストの愛で私たちが充分に満たされなければなりません。私という存在を高価で尊いと言い続け、その愛ゆえに十字架にかかり罪を赦してくださった。そして、私がその愛の中を歩めるように、いつもどんな時も共にいてくださる。

そういう神の愛に満たされ続けて生かされるときに、キリストの歩んだ道を、時には苦しみつつ涙を流しながらも一歩一歩、歩むことができる。そしていつの日か、地上での歩みが終わり、天にあげられるとき、「主よ、これがあなたが与えてくださる報いなんですね」と、この世では知ることができなかった、今は想像もつかないほどの喜びを、満たしを「神の国の祝宴」にて味わう。このいのちのゆるされる限り、私たちは精いっぱい主の約束を信じ共に生きていきましょう。